

ヨーロッパの人形劇について (第1報)

フランスの指人形劇—ギニョール

増 谷 篤 子

1. はじめに

フランス中部のローヌ・アルプス地方の中心地リヨンは、フランス第2の都市で、絹織物の生産地と、ワインとポール・ボキューズを始めとしたミッシェランの三つ星レストランが点在する食通の町として知られているが、同時に、18世紀末に生糸工場の労働者の娯楽として誕生したフランスの指人形劇ギニョール Guignol の発祥の地としても広く知られた町である。

1980年3月、初めてリヨンを訪れた時、ソーヌ河沿いの古い地区にある人形劇場〈Théâtre Mourguet〉で偶然遭遇したギニョールを見る子供たちの生き生きとした表情や反応は、非常に印象的であった。

人形劇の何がそれほど子供たちを惹きつけるのか、どんな形の人形劇がどのように演じられているのか、また、興味があったマリオネット（糸繰り人形）の構造やその作り方についての情報が、当時余りにも乏しく入手しにくい状況から、人形劇の盛んなヨーロッパで実際に見る機会を得て始めた人形劇場の実態調査をもとに、今回は、フランス革命 la Révolution と時を同じくして誕生したフランスの指人形劇ギニョールを、ヨーロッパの人形劇の変遷と共に紹介してみたい。

2. 人形劇の種類

一般に欧米でマリオネットというと糸繰り人形をさすが、フランスでは、同じく繰り人形劇全般を指し、指人形劇は、〈Les marionnettes à gaine〉糸繰り人形劇を、〈Les marionnettes à fil〉また、棒繰り人形を、〈Les marionnettes à tige〉と呼んでいる。影絵人形劇は、〈Le théâtre d'ombres〉一般には〈Ombres chinoises〉と呼び、中国からの伝来がその名の由来だと言われている。繰り人形はその形態や繰り方で様々に分類されるが、ゴルドン・クレエグが、形態的に分類した立体的な（丸形）と平面的な（平形）をベースに繰り方別に分類すると次の様に纏められる。

(1) 丸形

i) 手遣い人形

ア) 指操り・指人形・ギニョール・ブラッティニー

指を差し込める様にした頭・手が空洞の胴に取り付けられており、一般にいう指人形はこれをさし、原則として、人指し指または中指で頭部を、親指と中指または小指を手差し込んで操る。代表的なものとしては、フランスのギニョール、イギリスのパンチ・アンド・ジュディが良く知られている。

また、指先に頭部又は小さな人形をはめて操るものもあり、群衆場面で（後景で）用いられるグループ人形や、モスクワ人形劇場の主宰S.V. オブラツォーフのソロ・コンサートで演じられる指先に頭部や球形の玉だけをはめて操るものもある。

イ) 片手操り・手袋人形・マペット

口が自由に動く様になっている手袋式の人形で、手や足が自由にブラブラ動くだけのものやミトン型の鍋摺みの様な形態をしたものがあり、顔の表情を生き生きと表現することが出来る。＜セサミ・ストリート＞に登場するカーミットやアーニー等非常にポピュラーである。

ウ) 両手操り・両手遣い

人形を両手で操るものをさすが、足付指人形を両手で操る場合もあれば、頭部がマペットになっており、片手を人間の手そのままの形で演じたり、手や足を棒によって操ったり複合的なものがある。

エ) 抱え操り（文楽人形・車人形）

人形を抱えるようにして操るもので、人形を使う人形遣いの人数によって、一人遣い、二人遣い、三人遣い等と区別し、文楽等の人形浄瑠璃はその中で最も複雑なものである。

又、ロクロ車に人形を抱き抱えて腰掛け、両手と両足を操る八王子の車人形は、抱え操りの代表的なものである。

ii) 棒遣い人形

ア) 棒人形・マロット

棒の上部に首や人形が付いており、棒遣い人形の源初的なものと言われ、日本のオシラサマ人形や中世のヨーロッパの宮廷の道化師が使ったというマロットがある。

イ) (支え式) 棒操り・ロッド・マペット

人形の頭部および両手を下方から棒で操るもので、インドネシアの西ジャワを中心に演じられているワヤン・ゴレック (Wayang Golek) が代表的であるが、西ドイツのケルンの人形劇場＜Kölner Hännischen Theater＞では2メートル以上ある棒で操っている。

ウ) (吊り下げ式) 棒操り

上方から、人形の頭部を鉄の棒で吊り下げるものや、頭部を鉄の棒で吊り下げ、両手を鉄

増谷：ヨーロッパの人形劇について(第1報)

の棒と糸で操るものがある。代表的なものは、シシリー島のパレルモ、アシリアレ、シラクサの各地で見られるオペラ・デ・プピ (OPERA DEI PUPPI) や、北フランスのアミアン、ベルギーのブリュッセル、アントワープ等ヨーロッパで広く演じられている。

iii) 糸操り・マリオネット

人形を糸によって上方より操るもので、糸の数は数本から数十本に渡り、非常に繊細でリアルな動きを見せることが出来る。ヨーロッパ(ドイツ・スイス・オーストリア等)やインド・ビルマ・中国および日本で広く演じられている。

IV) からくり人形・オートマタ

糸で操られる「糸からくり」と、体内に仕込まれたバネ・ゼンマイ・歯車によって人形が独自に動く「離れからくり」があり、飛騨高山のからくり人形や18～19世紀のフランスのオートマタ(自動人形)がよく知られている。

V) かぶりもの・ぬいぐるみ人形

人間が被って演じるものをさし、目や口等が動くような仕掛けのあるものもある。人形劇を分類したとき、伝統的な人形劇として位置づけ出来ないとしても、テレビの児童向けの番組やウォルト・ディズニーのアニメーションの主人公ミッキー・マウスやドナルド・ダックまた、〈セサミ・ストリート〉のビッグ・バード等が広く知られている。

(2) 平形

ア) ペープ・サート・偏平板人形

紙人形に棒が付いていて、棒の回転で両面に描かれた動きの変化を見せるものや、板でレリーフ状に作られ、棒によって手を動かす西ジャワのワヤン・ケリテック (Wayang Kelitik) 等その実体を見せるもの。

イ) 影絵人形

子牛の革等で作られ、腰に関節があり後ろから支えるトルコのカラギョズ (Karagöz) や、操作棒を下から操る中央ジャワを中心に演じられているワヤン・クリット (Wayang Kulit)、タイのナン・ヤイ (Nang Yai)、マレーシアのワヤン・シャム (Wayang Siam) 等があり、一般的には、影を見せるもの。しかし、現在ジョクジャカルタで演じられているワヤン・クリットは、影よりも実体である操り師ダランの演じ方が重要視されている。

3. マリオネットの語源とイタリアの指人形

操り人形をさす「マリオネット」の語源は、聖母マリア〈Marie〉の愛称に由来しており、マリオン〈marion〉、マリエット〈mariette〉、そして、マリオネット〈marionnette〉と転化したものと言われ、ラテン語の〈morio〉が語源だと言われている。14世紀にイタリアのベネチアで復活祭時に、木のマリアの代わりに、聖母マリアの役を若い娘が演じたことから、「聖なる像」として、これを「マリエット」すなわち「小さき聖マリーの像」とか、「愛すべき聖マリーの像」と呼ばれたことから、ヨーロッパ全土に広がってゆき、時がたつにつれて、演じられる人形劇の総称として、定着していった。¹⁾

聖書からテーマを取った聖史劇が人形劇で演じられたのは、14世紀のミラノのドームやローマの教会堂の舞台や町や村等公衆の集まる野外劇場等であった。²⁾ いわゆる聖人の生涯を扱った奇跡劇と言われている「ミラクル」や、「飼葉桶の中の幼子キリスト」、「ヨセフとマリア」等の「キリスト降誕の物語」が、「クリスマス・イヴ」に盛んに演じられるようになっていった。現在でも、ヨーロッパでは、「クリスマス・イヴ」と共に、「イースター（復活祭）」に「キリスト受難劇」が各地で演じられている。

14世紀のイタリアには、聖史劇と共に、一般民衆に大きな共感を得、親しまれていた人形劇があった。ブレスチア Brescia のジオッピーノ Gioppino、モデナ Modena のサンドロン Sandorone そして、ローマ・ナポリのプルチネッタ Pulchinella である。これらの主人公たちは、下劣な顔つきの百姓であったり、大きな鷲鼻で背中に瘤がある道化で、見掛けは粗野で間抜け、しかし、ずる賢く、鋭い感受性と正義感の持ち主であった。この喧嘩好きな人形達は常に子供も大人も大いに喜ばせ、どの時代でも、死者、悪魔、皇帝、国王、聖職者、泥棒等の不吉な力に対して甚だしく無礼で、いつも魔女を驚かせ、警察官を殴り、時の為政者や成り上がり者を痛烈な皮肉と冗談で風刺した。彼らは、常に我が道を貫き、余りに大胆すぎて、たびたび殴られたりするが、常に絶体絶命の状況を脱し、復活して民衆を狂喜させた。

多くのこの喧嘩好きな性質の主人公達について考える時、殴打に対して、うまい言葉で自由に言いくるめる宮廷の道化師が思い出される。宮廷の道化師は、笑劇の道化役で、鳩胸で背中に瘤があり、大きな鉤鼻が特徴であるプルチネッタと多くの共通の特徴を持っていた。その先祖は、古代ローマのマックス Maccus で、アテラ笑劇（古代ローマの都市アテラを中心に発達した滑稽な仮面劇）の主人公であった。それは、胸と背中に二つの瘤を持ち、常に鈍重さを笑いや物にし、悪賢さと実際的能力の持ち主で良く知られている。この性格は重要な要素になっており、ヨーロッパの人形劇を代表する主人公達、ポリシネル、パンチ、ペトルーシュカ、ヤン・クラークセン、カスペルはその性格を継承している。

4. フランスの指人形ポリシネル

イタリアでは指人形劇を総称してブラッティーニ buratini と呼んでいるが、その語源は「布」を意味する「ブラットオ」という言葉から由来したものだといわれ、その主人公であるプルチネッタは、イタリアのコメディ・デラルテ *commedia dell'arte* に登場する道化で、16世紀～17世紀にヨーロッパ全土に伝えられていった。

1630年に、イタリアのジョヴァンニ・ブリオッチ Giovanni Briocci は、イタリアの指人形劇ブラッティーニを、リヨンにもたらし、その後パリに身を落ち着けた。パリでブリオッチは、当時、歯抜き師で患者を獲得するためという口実から、人形劇を始めるが、やがて、それは本業以上の人気になり、ポン・ヌフ近くにル・シャトウ・ギャラルド *le château Gaillard* という人形劇の舞台を構えた。

1649年、彼は、名前をジャン・ブリオッシュ *Jean Brioché* に変え、出し物もイタリア風からフランス風になり、主人公の名前もポリシネル *Polichinelle* と呼ばれる様になった。ポリシネルは、胸と背中に二つの瘤を持ち、羽の付いた帽子を被り、大きな鷲鼻をしていた。ポリシネルは、パリ近郊のサン・ジェルマン・アン・レーの市やパリ市内のネッスル *Nesle* の近くで演じられたが、そこでフランスの民衆は、政府を非難する精神を持ち、身振りや嘲笑、さもなければ出来うるかぎりの大胆さで王妃マリア・テレサと宰相マザランについてあてこすりをいう人物に出会ったのである。

ジャンの息子、ファンション・ブリオッシュ *Fanchon Brioché* は、1668年フェール・デ・サン・ジェルマン *Foire de Saint-Germain* でアルルカン *Arlequin* (イタリア喜劇の道化役) を演じた。そして1669年、宮廷でルイ十四世の皇子ドーフィン *Dauphin* のために、貴族たちの前で3ヶ月の間興行し、熱狂させた。それは当時、1日に付き20リーブルという大金を得る程の大当たりであった。大成功を納めたファンションも1680年3月21日にその生涯を終えたが、ポリシネルは、18世紀も、民衆の間だけでなく宮廷でも人気を博し、1808年リヨンでローラン・ムールゲ *Laurent Mourguet* がギニョールを登場させるまで、フランスで非常に人気があったといわれている。³⁾ 現在も、主役はギニョールに譲ったものの物語の紹介役や脇役として健在である。(写真①)

5. ギニョールの誕生とその背景

17世紀にヨーロッパ各地に広がっていった人形劇は、その後、娯楽として民衆の中に根を下ろし人気を得ていった。ギニョールの生みの親と言われるローラン・ムールゲは、1769年3月3日にリヨン市内のサン・ニゼールに絹織物工の子として生まれた。1788年11月22日ジャンヌ・

エステレル Jeanne Esterle と結婚。その後1790年から1809年の間に10人の子供をもうける。1789年フランス革命当時のリヨンで20才のムールゲは絹織物工であったが、当時のリヨンは絹織物産業が斜陽化し、革命の混乱と貧困、その上大飢饉であった。恐怖政治の始まった1793年、ムールゲは生活のため革命の影響の少ない田舎で櫛や小さな木管楽器、薬あるいは一針分の長さに切った糸や布を売る大道商人となる。

この年、公安委員会に対して反乱を起こしたりリヨンは8月9日より国民軍の攻撃を受け、それは1か月間続いた。国民公会はリヨンの破壊を命じ、その名前を「解放市」Commune affranchie（コミュン・アフランシ）と呼ぶことに決め、反徒への処刑は4ヵ月のあいだ間断なく続けられた。1798年、ムールゲは、訓練も免許も必要としなかった歯抜き師になる。最初高価な軟膏や素人薬を売るため、無料で歯を抜くが、歯を抜く客の為の肘掛け椅子の脇に、客集めの為の人形劇の舞台を設置する。これは、150年前やはり歯抜き師であったブリオッシュエが、パリのポン・ヌフで始めた習慣の所産であった。

最初彼はイタリアの指人形劇ブラッティーニを採り入れ、ポリシネルや彼の妻あるいは悪魔等コメデア・デラルテの伝統的な笑劇の粗筋を演じた。1804年、ムールゲは、人形劇に専念するため歯抜き師を断念し、4月、プチ・チボリ Petit Tivoli の庭園に小さな劇場を開設する。この時、ムールゲは、彼の相棒となるトマ爺さん père Thoma ことランバート・グレゴール・ラドレ Lambert Grégoire Ladré に出会う。彼は、1770年アルデンヌ県のジヴェ Givet 生まれで、コメディアン才能のある村のヴァイオリン弾きで人気があった。自作の唄を歌い、社会を批判する二人の興行は大成功であった。(写真②・③)

しかし、ボジョレー好きなトマ爺さんは、酒に溺れてしばしば興行を休み、それはやがて深刻な問題となっていた。そして1年後、二人の協同興行は失敗に終わった。人形劇場にとって、トマ爺さんの抜けた穴は非常に大きかった。この時期に、ムールゲは、一つの人形を作り出したと想像されている。それがニャフロン Gnafron で、リヨンの最初の指人形である。ニャフロンは、赤鼻の酔っぱらい（アル中）で、歯並びの悪い引きつった口をした、豪快で滑稽だが、割れるような大声で話すお喋りで、ギニョールの相棒となる。モデルは、その風貌や性格からトマ爺さんだと言われている。⁴⁾ また、ニャフロンという名は、リヨン言葉の〈gnafre〉靴直しに由来している。(写真④)

その後、二人の興行は、プロットオ Brotteaux の脇のジャルダン・シノワ Jardin Chinois に人形劇場の舞台を設置するために再開した。ギニョールは、1908年に百周年を迎えたことから、1808年頃、主人公であるギニョールが誕生したと推測されている。ギニョールは、丸顔で反り返った鼻をし、口の両脇にえくぼのある大きな目をした童顔で、モデルはムールゲ自身を思わせる。また、服装はウールの茶色のモーニング・コートに金ボタン、頭にはピッタリした黒の革の帽子をかぶっている。髪型は、サルシィフィ salsifis という名前のカトガン(18世紀に流行したうなじのところで束ねた髪型)で、18世紀末で流行したスタイルであった。ギニョールの

服装の由来については諸説があるが、18世紀末の貧しいリヨンの絹織物工がモデルで、当時、流行であった服装を取り入れたものと思われる。(写真⑤)

ギニョールの大きな二つの目は、社会に対して見開かれ、微笑みを絶やさぬ口元には、素朴さと優しさが感じられるが、人間の愚かさや滑稽さを暴き、揶揄する皮肉な精神は、カトガンの跳ねる様な動きによって表現される。革命下のリヨンで、常に正義の味方をし、下層階級を操る特権階級や成り上がり者を、嘲弄し、こてんぱんにやっつけるギニョールは、民衆の笑いを誘うと共に、大きな共感を呼び、愛され民衆と共に生きていった。このようにして、ギニョールは誕生したのである。ギニョールの観客は、勿論、子供たちもいたが、絹織物の職工や綾糸工あるいは靴直しの職人といった民衆であった。

また、ギニョールの名前の由来については、幾つかの仮説が知られている。ジャン・バプティスト・オノフリオ Jean-Baptiste Onofrio は、1865年、彼の著書である *Théâtre Lyonnais de Guignol* の序文の中でムールゲが劇中で好んで使った *<C'est guignolant!>* ([不運のように思われて]腹立たしい、とか、癩にさわるという意味) から名付けられたと述べている。Guignol は *<guigne>* あるいは *<guignon>* (不運という意味) から転じていったと考えられている。⁵⁾

また、1810年頃、イタリアのロンバルディアの小さな村 Chignolo からやって来た絹織物工が、その性格や陽気さから有名になりその出身地である Chignolo が、Chignol そして、Guignol になった。⁶⁾ あるいはまた彼がムールゲにロンバルディアの指人形 Girolamo を伝え、徐々に Girolamo が Guignol に変わっていったという説。⁷⁾ (Girolamo は、ミラノの指人形で、粗野で抜け目のない百姓としてよく知られていた。) あるいは、リヨンの絹織物工で実在の人物ジャン・ギニョール Jean Guignol の名前がその語源であるという説⁸⁾ や1804年にリヨンで上演されたラ・コメデア・ドゥ・ドルヴィニ *la comédia de Dorvigny* の喜劇 *<Nitouche et Guinolet>* の Guinolet に由来しているという説⁹⁾ があるが、ニャフロン¹⁰⁾の誕生やその名の由来、リヨンに生まれ育ったムールゲの時代的背景や社会的背景そしてギニョールの風貌を考えた時、やはり *<C'est guignolant!>* が有力であるように思われる。

その他の登場人物は、ギニョールの妻マドロン Madelon、ブルジョアの典型カネゾウ Canezou、からいばりする家主のピファルド Piffard、絹織物の経営者バテンディエ Battendier 等であった。また、ギニョールの持つ叩き棒は、上部が十文字に割れていて、叩いた時に鋭い音を発し、より大きな効果を出すよう工夫されている。

ムールゲは、春から夏の間、昼間は子供の為に、夜は大人の為に1日2回の興行をし、冬の間はサン・ポール広場2番地にある彼のアパートの1階で蠟燭の明かりの中で上演した。ムールゲは、ギニョールを職業としてから最初の12年間(1808—1820)人形劇の舞台で大抵の場合ひとりで働いた。そして、トマ爺さんとの協働も段々と減り、1818年から1820年頃それは完全に終わった。

その後、1820年に彼の息子エチヌヌ Etienne、娘のローズ Rose 等が加わり、ムールゲ一座は、

フランスの村々を巡業した。やがて、1838年にリヨンに《カフェ・ド・カヴォー・セレスチン》Café du Caveau Célestins という最初の常設の人形劇場を作った。その後、1840年、ヴィエンヌ Vienne に移り住んだムールゲは、カフェ・テアトルを開き、子供たちの為に昼興行を行った。そして、1844年12月30日、75歳の生涯を閉じたのである。ギニョールはその後、彼の子供たちから孫へと引き継がれていった。¹⁰⁾

6. 現代のギニョール

リヨン市内には、ローヌ・ソーヌの二つの河が流れているが、ソーヌ河沿いに近いリュ・カランドにある《テアトル・ムールゲ》Théâtre Mourguet は、国立の人形劇場で、水・日と祭日の午後2回子供の為の人形劇を上演している。劇場は、250席程の大きさで、室内にある舞台の下にはオルガンが置かれ劇の進行に併せて演奏される。時には即興で雰囲気盛り上げ、今は、ムールゲが創作した当時以上に可愛い童顔になっているギニョールが大活躍している。ここでは、ニャフロンやマドロンも昔と変わらず健在で、3、4歳～10歳位の子供たちの熱狂する姿が見られる。(写真⑥・⑦)

また、市内のポルク・ドゥ・テテ・ドールには、《テアトル・ドゥ・ヴュー・リヨン》Théâtre du Vieux Lyon という野外劇場があるが、夏の間、3、4、5、6時と1日4回公演している。

大人向きには、《セルクル・ローラン・ムールゲ》Cercle Laurent Mourguet が、モリエール等の喜劇を演じている。1981年春には、『ドン・ジュアン』を、面白可笑しく演じていたが、ドン・ジュアンを演じていたのはニャフロンであった。これらの劇場を主宰しているのはいずれもローラン・ムールゲの子孫たちで、彼のギニョールに対する情熱は今も受け継がれている。

また、17世紀から人形劇が盛んであったパリでも、現在ギニョールは健在である。パリ5区、カルチュ・ラタンにあるリュクサンブール公園の中に、1933年にロベルト・デザルティ Robert Desarthis によって設立された《テアトル・デ・リュクサンブール》Théâtre des Luxembourg という指人形劇場がある。さすがに7・8月のヴァカンス・シーズンになると並ぶ子供たちの数は減ってしまうが、それでも常に長蛇の列が出来るほど人気があり、祖父母や両親に手を引かれた幼児やリセの低学年の児童たちが観客で、先生に引率された園児たちもやって来る。座席は250席。両脇と後方の席は保護者席で中央より前は子供たちが見やすいように大人たちは座れない。出し物は、「三匹の子豚」「ピノキオ」「長靴を履いた猫」等、通常水・土・日の午後2回上演されている。上演時間は、対象が小さな子供たちなので、10分間のインターヴァルを挟んで前後30分計70分余りである。1989年3月に訪れたとき上演されていたのは、「三匹の子豚」で丁度復活祭の休日であったため、劇場の前は長蛇の列であった。(写真⑧)

また、7・8月のヴァカンス・シーズンは、16時から1回の上演である。物語の主人公は、それぞれピノキオであったり、三匹の子豚であるが、常に、正義の味方であるギニョール

増谷：ヨーロッパの人形劇について(第1報)

が登場し、悪者たちを一気にやっつけてしまう。ギニョールの登場や活躍に送る子供たちの熱狂的な声援は、想像を遙かに越えるほど凄まじいもので、人気の高さをよく表している。また、エッフェル塔で知られるシャン・ド・マルス公園にある《マリオネット・デュ・シャン・デュ・マルス》Marionnette du Champ-de-Mars やヴェユット・ショーモン公園にある《マリオネット・デュ・ポルク・デ・ヴェユット・ショーモン》Marionnette du Porc des Buttes-Chaumout 《ギニョール・アナトール》Guignol Anatole (写真⑨)《ギニョール・ドウ・スクエア・サン・ラムベール》Guignol du Square Saint-Lambert (写真⑩)等、郊外を入れると森や公園の中に10か所ほどマリオネットの劇場があり、「眠り姫」「シンデレラ」「美女と野獣」「白雪姫」等が、水・土・日に上演されている。

7. おわりに

ヨーロッパの指人形劇は、その歴史的背景や社会的背景を抜きにしては語る事が出来ない。中世の宮廷の道化師や百姓たちが主人公であった時代から、現在に至るまで、主人公は常に一つの典型を保ち続けている。時の権力や社会悪と闘い、為政者を愚弄し、人間の愚かさや滑稽さを暴露し、正義を貫き通す。直接物申せば首が飛んだ時代でも、人形たちは、パロディ化した王や貴族、悪徳商人あるいは警官を棍棒でたたきのめし、嘲弄し、民衆はそれに熱狂したのであった。そこには、民衆のしたたかさを見ることが出来る。

特に、ヨーロッパの人形劇に、第二の大きな開花をもたらしたといわれるギニョールは、フランス革命を背景に、民衆の中から誕生した民衆人形劇で、その存在の意味は非常に大きい。登場人物は、どの国の、いつの時代にでも存在するごく普通の、しかし、典型的な人々であり、繰り広げられるドラマは常に喜劇的で、社会不安と貧困の中で、当時存在した下層階級の人々を慰め、喜ばせ、民衆と深く結びついていたのである。

リオンでローラン・ムールゲによって始められたギニョールは、200年たった今、リオンの《サルクル・ローラン・ムールゲ》を除いて、完全に子供の為の人形劇に定着したと言えるだろう。パリの場合、出し物は多くの場合、ウォルト・ディズニーの漫画やグリム等の童話の主人公で、単純な勧善懲悪になっており、正義の味方ギニョールが、乱暴者や悪者を棍棒で痛快なまでに引っぱたき、こてんぱんにやっつけて、めでたし、めでたしで物語が終わるところは、万国共通であるが、多くのフランス映画や小説の結末がハッピー・エンドに終わらず、人生そううまくはいかないという皮肉でクールなフランス人の人生観も、ギニョール小屋の中では、いつも安心できるハッピー・エンドであることは、非常に興味深いものである。

そしてまた、ヨーロッパ各地の人形劇場で見た主人公達の中にある普遍性と典型は、それが大人向けであれ子供向けであれ、人間がパロディ化されたもので、それは今後も間違いなく受け継がれていくという確信を得たのだった。

註

- 1) Jacques Leguay & Maurice Layac, *Marionnettes de bois et de chiffons*, Paris, Editions Guy Authier, 1977, p.13
- 2) René Simmen, *Le monde des marionnette*, Zurich, Editions Sliva, 1972, p.8
- 3) J. Leguay & M. Layac, op.cit., pp.42-44 : R. Simmen, ibid., p.36
- 4) Paul Fournel, *L'histoire véritable de guignol*, Paris, Slatkine France, 1981, p.21 : R. Simmen, ibid., p.30 : P. Fournel, *Les marionnettes*, Paris, Bordas, 1982, p.33
- 5) P. Fournel, op.cit., pp.26-27 : R. Simmen, loc. cit., : Henri Leroudier, *Lyon guignol*, Lyon, Editions S.M.E., 1976, pp.19-20
- 6) R. Simmen, loc. cit., : Henri, L. ibid., pp.18-19
- 7) P. Fournel, op. cit., p.28
- 8) Loc. cit
- 9) P. Fournel, ibid., pp.29-30 : R. Simmen, op. cit., p.30 : H. Leroudier, op. cit., pp.21-22
- 10) P. Fournel, ibid., pp.31-37

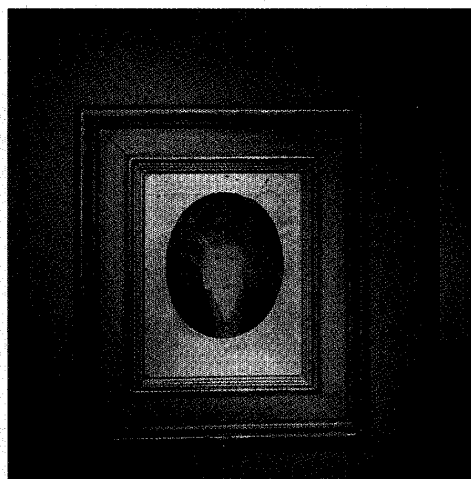
参考文献

- 川尻泰司 『日本人形劇発達史・考』 晩年書房 1986年。
立川昭二 『人形からくり』 日本ブリタニカ 1980年。
南江治郎 『人形劇入門』 保育社 1969年。
宮尾慈良 『アジアの人形劇』 三一書房 1984年。
安田 武 『日本の人形芝居』 平凡社 1976年。
アンドレイ・フェドートフ (大井和雄訳) 『人形劇の秘密』 晩成書房 1980年。
コンスタン・ミック (梁木靖弘訳) 『コメディア・デラルテ』 未来社 1987年。
ピーター・バーク (中村賢二郎/谷 泰訳) 『ヨーロッパの民衆文化』 人文書院 1988年。
René Simmen, *Le monde des marionnette*, Zurich, Editions Sliva, 1972
Paul Fournel, *Les marionnette*, Paris, Bordas, 1982
Paul Fournel, *L'histoire véritable de guignol*, Paris, Slatkine France, 1981
Jacques Leguay & Maurice Layac, *Marionnette de bois et de chiffons*, Paris, Editions Guy Authier, 1977
Henri Leroudier, *Lyon guignol*, Lyon, Editions S.M.E., 1976

増谷：ヨーロッパの人形劇について(第1報)



① Polichinelle(リヨンのマリオネット博物館にて筆者撮影)



② Laurent Mourguet の肖像画(リヨンのマリオネット博物館にて筆者撮影)



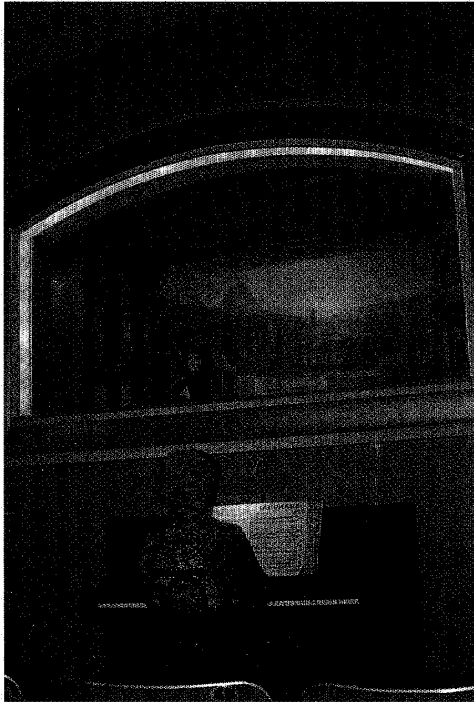
③ Mourguet 製作の Gnafron, Madelon, Guignol(リヨンのマリオネット博物館にて筆者撮影)



④ 現在の Gnafron(リヨンにて筆者撮影)



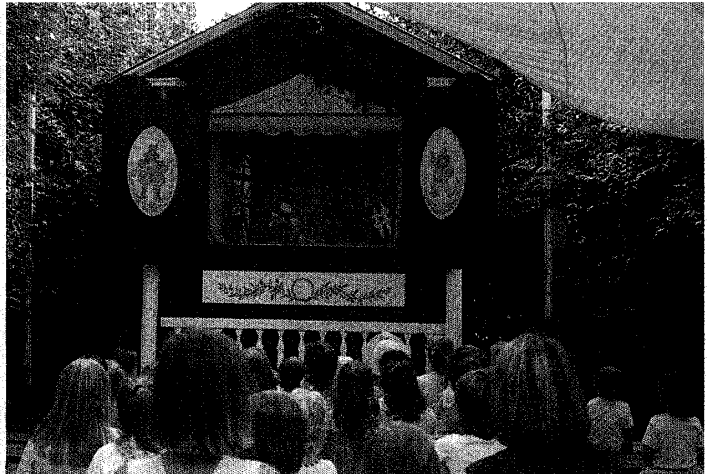
⑤現在の Guignol(リヨンにて筆者撮影)



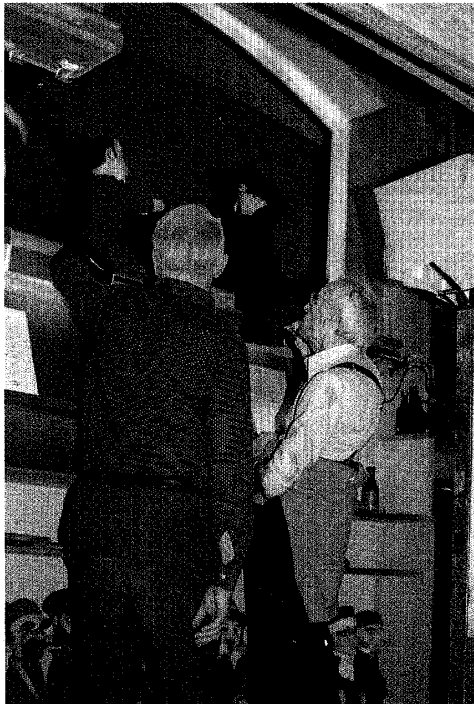
⑥ Théâtre Mourguet (リヨンにて筆者撮影)



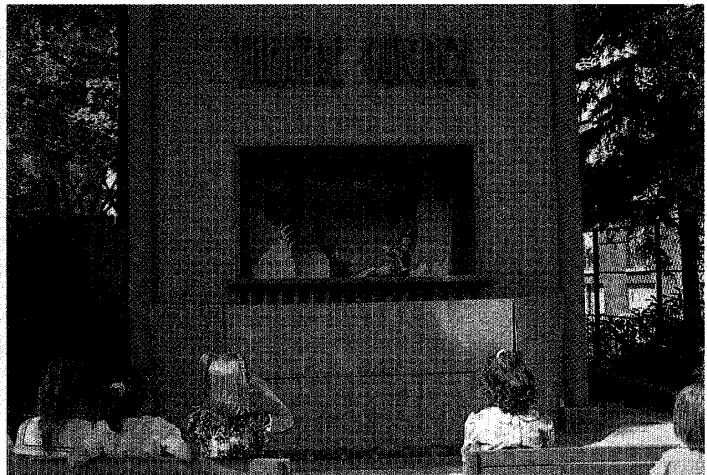
⑧ Théâtre des Luxembourg (パリにて筆者撮影)



⑨ Guignol Anatole (パリにて筆者撮影)



⑦ Théâtre Mourguet (リヨンにて筆者撮影)



⑩ Guignol du Square-Lambert (パリにて筆者撮影)